北海道知事賞

小樽市立北陵中学校　2年
小鷹　梨真

「取られるもの」から「支え合うもの」へ

買い物をしてレジに並ぶたび、私は少しだけため息をついていた。商品の価値に上乗せされる消費税の存在のせいだ。自分が自由に使えるお小遣いが、税金によって減らされてしまう。そんな風に考えていた私は、税金を「できることなら払いたくない、国に一方的に取られるもの」だとずっと思い込んでいた。

そんな私の考えが変わったのは、ある雨の日のことだった。激しい雨の中、私は通学路の歩道を歩いていた。ふと足元を見ると、道路のあちこちにある排水溝が勢いよく水を吸い込み、水が道路に溢れないように機能していた。もしこの排水溝が詰まっていたら、道路は水浸しになり、私は学校にたどり着くことすらできなかったかもしれない。毎日のように何気なく歩いている頑丈な道路、夜道を明るく照らす街灯、そして私たちが学校で無料で配られている教科書。これらは一体、誰のおかげで存在しているだろうか。その疑問の答えを探したとき、私が行き着いたのが、あの大嫌いだった「税金」だった。

調べて見ると、私たちの生活の「当たり前」は驚くほど税金に支えられていた。もしこの世の中に税金がなかったらどうなるだろうか。道路が壊れても誰も直してくれず、街はゴミであふれ返ってしまう。火事になっても、高い費用を払わなければ消防車は来てくれないかもしれない。つまり、お金持ちしか安全で快適な暮らしができなくなってしまうのだ。

そう考えると、税金に対する見方が180度変わった。税金は、国に「取られるもの」では決してない。この社会で生きる全員が安全に、そして平等に暮らしていくために、みんなで少しずつ出し合う「社会の会費」なのだ。私がレジで払っていた消費税も、めぐりめぐって誰かの医療費や、お年寄りの生活、そして私自身の教科書代として役に立っているのだと気づいた。

私たちは一人では生きていけない。誰しもが病気や怪我をしたり、災害に遭ったりす

るリスクを抱えている。そんなとき、税金という仕組みがあるからこそ、お互いに手を差し伸べ合い、安心して明日を迎えることができる。税金とは、社会全体で作り上げた「優しさの仕組み」なのだと思う。

　これまで私は、税金を義務という言葉だけで捉え、負担だと感じていた。しかし、その本質が「支え合い」であると知った今、社会の一員としての責任の重さを感じている。まだ働いていない私は、今は社会に支えられている側の存在だ。だからこそ、将来はしっかり働き、今後は自分が誰かを支えるために、気持ちよく税金を納められる大人になりたい。